

鶴山書院報

第15号

公益財団法人
孔子の里

〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原庫舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com

発行人
理事長 横尾 俊彦

七十年の歳月が運ぶ

人生の輝き



公益財団法人孔子の里

理事長 横尾 俊彦

(多久市長)

今年多久市は市政施行70周年を迎えます。多くの先人の皆様の計り知れないご尽力と創意工夫に対し心より敬意と感謝を捧げます。

七十年といえば論語に「七十にして心の欲するところに従えども矩を踰えず」があります。自分の心のままに行っても道德的な規範から外れることがない。孔子が七十歳で到達した境地といえます。さらに、どんな人も自分の行動を確実にコントロールできるのは七十歳を過ぎてからとも読めます。

矩とは規範、節度、規律です。自分らしい生き方を貫いても、世間に迷惑をかけることなく、人様を痛めることもない。自己責任による選択はまさに「自らに由る」ものであり、理想的な生き方にも通じます。

最近はこの「矩」が薄くなっているかもし

れません。日本に伝わる礼儀作法や道徳の教えの実践には、人に感謝される所作があり、美しい姿にも映り、感動も呼びます。

徳ある人生のため、時に自分を顧みたいですし、日々の学びを怠らず努めましょう。

「徳は孤ならず必ず鄰あり」ですから。

人生百年時代に続けたい学び

今回の会報には当財団が続けている「全国ふるさと漢詩コンテスト」の紹介があります。

漢詩はかつて学問としての学びの光景や吟詠の際に必須でした。師弟や朋友・同志の宴席でも漢詩は生まれ親しまれ、即興で漢詩を詠みあい、魂の交流や絆の強化に功があったといわれます。それを色紙にしたため、互いの志や心意気を交わした訳です。なんとも粋な集いです。特に日本では、そこに刻苦勉励、自己研鑽、人格陶冶、開物成務などの思いが満ちています。いきなりその域まで復活は叶わずとも、先人達はそのような学問文化を嗜む心があったことも後世に伝えたいものです。生涯にわたって学び続けることは大切な事です。新たな知は程よく大脳も刺激し、新たな自分を日々生み出す糧にもなるはずです。



【春容】(長崎県 小川美喜雄)
多久百景写真コンテスト入賞作品

〈特集〉

第26回全国ふるさと漢詩コンテスト…………… 2

石井鶴山の「北海観風草」の旅(其の六)…………… 6

熊本大学教授 中尾健一郎…………… 6

草場船山に学んだ鹿島藩士八沢棟之進の生涯…………… 8

鹿島市民図書館学芸部 高橋 研一…………… 8

太古のブランド石材「多久のサヌカイト」…………… 10

佐賀県文化課文化財保護・活用室 越知 睦和…………… 10

多久家文書『水江事略』(翻刻文)紹介…………… 13

公益財団法人孔子の里理事 服部 政昭…………… 12

華表を仰ぐ(第二回)…………… 14

多久市郷土資料館長 藤井 伸幸…………… 14

第26回 全国ふるさと漢詩コンテスト

令和5年11月25日、多久市東原舎講堂において、第26回全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式及び公開講演会を開催しました。

全国ふるさと漢詩コンテストは、儒学と文化の里づくりを目的に、江戸時代の郷校東原舎で学ばれていた国学や漢詩に親しんでいたと平成10年に始まったコンテスト。今回で26回目を迎え、国内の漢詩大会の中でも指折りのコンテストと言われるようになりました。

今回は「宿」をテーマに募集。全国各地からの応募があり、台湾からの応募もありました。応募者総数は148名、応募作品数は218点でした。

応募作品は、大木康先生（前東京大学東洋文化研究所教授）、鷲野正明先生（国士館大学名誉教授）に審査いただき、最優秀賞に千葉県松戸市の田沼裕樹様の「山中逆旅」が選ばれました。

同日、最優秀賞の作品を陶板に刻んだ石碑を多久聖廟参道脇に建立し、除幕式を行いました。表彰式に併せ、公開講演会を開催しました。宇野茂彦先生（中央大学名誉教授、公益財団法人斯文会理事長）を講師に招き、

「論語の礼讓〜日本に於ける礼讓思想の受容〜」と題し、ご講演いただきました。

宇野先生は、「孔子の思想の中ではなくて礼が代表的な徳目である。」「論語に、禮之用和為貴（礼はこれをもつてたつとしとなす）、とある。」「礼とは、すでに人間社会の中にある形（風俗、習慣、制度等）のこと。礼に従うとは、社会の中にある形に従うこと。うやまい、人にゆずること。」と話され、「礼讓の思想は、中国から伝えられたものだろうか。そもそも日本にあつた思想が礼讓という言葉に当てはまったのではないか。」と提起されました。そして、聖徳太子が制定した「十七条憲法」

や、藤原惺窩の弟子、角倉素庵が朱印船貿易で従事する客商人や乗員に求めた倫理規範「舟中規約」を紹介され、「礼讓とい

う観念は日本文化の基層となつていて美徳である。論語の言葉によってそれが表現されている」とお話されました。



公開講演会（講師：宇野茂彦先生）



▲（右から）高島美津子様（奨励賞受賞）、副島陽子様（入選受賞）、齋藤昌枝様（優秀賞受賞）、岡田讓様（優秀賞受賞）、田沼裕樹様（最優秀賞受賞）、宇野茂彦先生、横尾俊彦市長、石田俊二教育長

最優秀賞

山中の逆旅

千葉県松戸市 田沼裕樹

山中逆旅

田沼裕樹

乗春偶到白雲村
 春に乗じて偶たま到る白雲の村
 滿耳鶯歌暖正繁
 耳に滿つ鶯歌暖かにして正に繁し
 山館主人呼不答
 山館の主人呼べども答えず
 一風吹却代開門
 一風吹却して代わつて門を開く

【講評】「白雲の村」は俗世から遠く離れた山中の村。鶯が頻りに鳴いて旅人を暖かく迎えてくれる。宿屋の主人はいないのか、呼んでも返事はない。代りに風がさつと吹いて門を開けてくれた。長閑で味のある詩。



横尾俊彦市長(理事長)より最優秀賞の表彰を受ける田沼裕樹様



最優秀賞の漢詩碑

優秀賞

菊枕

東京都渋谷区 岡田讓

菊枕

岡田讓

獨對客燈縫枕囊
 獨り客燈に對して枕囊を縫へば
 清芬鬱鬱滿空牀
 清芬鬱鬱として空牀に滿つ
 故園籬菊花開否
 故園の籬菊花開きしや否や
 喚起歸心是此香
 歸心を喚び起すは是れ此の香

【講評】「獨」客燈「空牀」と言つて旅にある孤独な主人公が描かれる。枕の囊を縫いながら菊の香りによつて故郷が懐かしくなり、「歸心」が呼び起される。構成が巧みである。

優秀賞

客船に泊す

栃木県下野市 齋藤昌枝

泊客船

齋藤昌枝

江色冥冥帶暮煙
 江色冥冥として暮煙を帯び
 孤羈寂寂不能眠
 孤羈寂寂として眠る能はず
 招來幽客篷窓裏
 招來する幽客篷窓の裏
 今夜流螢共一船
 今夜流螢一船を共にす

【講評】独り旅で夕暮れどきの寂しさに寝つかれない。そこで風流を愛する船客を招き、共に舞い飛ぶ螢を眺める。「幽客」は静かに世を避けて暮らす人。詩中の主人公と心が相通じる。

入選

友を訪う

訪友

佐賀県佐賀市 副島 陽子

副島陽子

久瀾尋郷宿友家 久瀾郷を尋ね友の家に宿す
 今來古往滿庭花 今來古往滿庭の花
 訛音可愛清風夕 訛音愛す可し清風の夕
 喜喜皴顔年月餘 喜々たり皴顔年月餘かなり

【講評】 故郷の友人の家にとまると、庭の花もお国なまりもそのままだが、案しく語らう二人の顔には長い年月の皴が刻まれている。久しぶりに会った嬉しさも、もう若くはないさびしさを詠う。

入選

曲江の畔に宿る

宿曲江畔

神奈川県川崎市 中山 洋子

中山洋子

急雨欲來風滿林 急雨來たらんと欲し風林に満つ
 横波忽走岸頭侵 横波忽ち走り岸頭侵す
 荒村盡日無人影 荒村 尽日人影無し
 曳杖老翁孤立吟 杖を曳く老翁孤立ちて吟ず

【講評】 前半は「急雨」「風」「横波」と不穏な事がおこりそうな雰囲気。荒れた村には人影もない。独り曲江のほとりによつて来た老翁はこの不穏な世を嘆くかのように詩を吟じる。

入選

夜に山館に投ず

夜投山館

神奈川県藤沢市 小嶋 明紀子

小嶋明紀子

身著征衣經幾年 身に征衣を著けて幾年をか経たる
 逍遙百里到雲邊 逍遙百里雲邊に到る
 破窓纔作四更夢 破窓纔かに作す四更の夢
 三五清光照獨眠 三五の清光独眠を照らす

【講評】 「幾年」「百里」「四更」「三五」と数字をうまく使い、長年の旅の生活のなかでひと時の安らぎを得たことを詠う。結句は満月が孤独を慰めるように眠っている旅人をやさしく照らす。

奨励賞

歳晚書懷

歳晚書懷

佐賀県鳥栖市 高島 美津子

高島美津子

窮陰感慨古今同 窮陰の感慨古今同じ
 悟得人生幻夢中 悟り得たり人生幻夢の中
 回首忽忙違宿志 首を回せば忽忙宿志に違ひ
 青雲路遠一年空 青雲の路遠く一年空し

【講評】 人の命は夢のように儂いもの。そう悟つてはいても、歳晚にはいつも同じ感慨に浸る。一年があつたという間に過ぎて青雲の志はいっこう遂げられない。と、人生夜の宿の尽きない感慨。



漢詩碑除幕式



公開講演会

全国ふるさと漢詩コンテストを振り返って

公益財団法人孔子の里 事務局長 亀川 将平

当財団が主催している全国ふるさと漢詩コンテストは二十六回を数え、全国規模で実施されている漢詩大会の中でも一目置かれる大会となっており。これまでの漢詩コンテストを振り返るにあたり、「第一回目はどういう内容で実施されていただろうか？」と疑問に思い資料を読み返してみた。

一、第一回

当初の資料は、事務所の古い書類棚の奥にしまつてあった。平成十年十一月が初回である。前年の九月に若千四十一歳で多久市長に就任した横尾俊彦多久市長（財団法人（当時）孔子の里理事長）のもとで始まった。その主催は財団ではなく、市役所の企画課が「儒学と文化の里づくり事業」の一環として実施されている。募集のテーマは「ふるさと」。全国から141人、221点の応募があつており、今とあまり変わらない数である。違う点としては、内容（日程等）が肉厚となつてのことだ。

現在は一日で完結するようプログラムを組んでいるが、当初は二日間わたつて実施されていた。初日は、石川忠久先生を含め三名の審査員と最優秀賞候補者四名を多久に招き、その作品への想いを聞いた上で、最終審査会を実施し一席を決定していた。その翌日に表彰式、講演会及び食事会を実施。副賞も豪華で、最優秀者に

は賞金十万円が贈られていた。

二、『漢詩』の捉え方

資料の中には、日本経済新聞の記事も綴じてあつた。見出しには「漢詩ニューウェーブの到来か」とある。内容は、石川忠久先生が大修館書店から出版された『漢詩を作る』という書籍が、取っつきにくいテーマにも関わらず一冊も売れているという事実。そして、この世間の動きに合わせ、佐賀県多久市が始めた『漢詩』を使った地域おこし「漢詩コンテスト」に取り組んでいる実態を、重要文化財多久聖廟の歴史と多久の文化を絡めた内容で大きく取り上げられていた。

やっぱりというか、今と同様に当時から『漢詩』は取っつきにくい印象があり、世間的には「特殊なもの」という捉えられ方だったのだろう。

三、行政の理解と支援

平成十二年からは財団の主催となり、十六年からは今と同様の形式で実施している。令和二年からは石川忠久先生に代わり、宇野茂彦先生をお招きして講演会を実施している。

二十六年という時代の流れもあり、細かい部分は色々と変わってはいるが、応募料が無料であることは当初からずっと変わらない。（筆者の知る限り、全国規模の漢詩大会で応募料

を必要としないのは当コンテストのみ）その事由としては、コンテストに関わる多く関係者の尽力によることは言うまでもないが、この文化的イベントに対しての多久市の理解と支援、これが大きな要因である。

多久聖廟創建三百年を記念して製作された『多久の詩情』の序文で、石川忠久先生はこのコンテストについて、次のように述べられている。「このような風雅な催しを続けている場所は、全国見渡しても他にない。まさに快挙といふべきであり、横尾市長の卓見に深甚の敬意を表す」と。

四、変化と展望

事務局として十年以上、このコンテストに関わっているが、ここ数年、応募傾向に変化が生じているように感じている。以前は大半が高齢層で、中年層の応募作品が少しあるといった様子だったが、最近では若年層の応募も散見されるようになった。応募料が無料である当コンテストは学生や始めたばかりの人にとっては都合が良いことだろう。

また、最優秀賞を受賞される年齢にも変化がある。以前は熟練の高齢者が受賞されることが多かったが、近年は働き盛りの層が目立つ。最近の5大会中3大会が五十歳以下の受賞だった。関係者との会話などで、少しづつではあるが俳句や川柳と同じように、漢詩の奥深い魅力に触れることで、その面白さに気づく人が増えてきていると感じている。

もしかしたら、第二次『漢詩ニューウェーブ』の到来も有り得るかもしれない。その時に当コンテストが受け皿になれるよう、これまで以上にしっかりとした運営を心掛けていきたいと思う。



第1回公開講座（講師：石川忠久先生）



第1回全国ふるさと漢詩コンテスト 漢詩碑除幕式

石井鶴山の「北海観風草」の旅(其の六)

— 歌聖・柿本人麻呂を追想する —

熊本大学 教授 中尾健一郎

佐賀藩儒・石井鶴山(一七四四—一七九〇)は、

天明六年(一七八六)春に江戸を出発し、同年夏五月七日に佐賀藩に帰りついた。『北海観風草』は、帰国後、数日して男児出生の詩を以て摺筆となる。

前回は越前国(現在の福井県東部)の永平寺、若狭国(現在の福井県西部)の空印寺にて作られた詩を紹介した。今回は若狭国を発った鶴山が、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲といった日本海側の諸国を経た後に至った、石見国(現在の島根県西部)高津山(現在、益田市高津町にある山)にあった真福寺(現柿本神社)にて詠んだ詩を取り上げよう。

真福寺は別当寺(神社を管理する寺)であり、当初、人丸寺と呼ばれていたが、享保八年(一七二三)に祭神柿本人麻呂の没後一千年に際して、朝廷から柿本大明神の称号と柿本社の社号を授けられ、津和野藩三代藩主亀井茲親によって高角山真福寺と改められた。その後、明治維新の廃仏毀釈により神社となった。ここで鶴山が作ったのは、次の一首である。

高角山人丸祠

人丸、石州戸田村の柿樹の下に降る。文武、持統等の朝に任ぜられ、大夫に拜せらる。嘗て芳野に宴するに陪して国風(和歌)を献じ、播磨守に転任して、石州高角山の下に卒す。山月の詠、絶筆と為る。土人、祠を鴨島に建つるも、鳥は後に風濤の為に没す。因りて高角に移し、神木として柿を植え、其の実、形は筆頭に似る。石川、吹上の浜は、皆な其の遺蹟なり。(原漢文)

榎乱石川攀古丘

榎もて石川を乱り 古丘

海風吹上白砂洲

海風吹き上ぐ 白砂の洲

春花曾履芳山蹕

春花曾て履う 芳山の蹕

朝霧猶思明石舟

朝霧猶お思う 明石の舟

山角月残人不見

山角月残るも 人見えず

波心島没鴨空浮

波心島没して 鴨空しく

躊躇細討歌仙蹟

躊躇す 細かに歌仙の蹟

柿実于今学筆頭

柿の実 今に于いて筆頭

(『石井鶴山先生遺稿』、作品番号563)

題注の内容は、おおむね次のようである。人麻呂は、石見国戸田村の柿の木の下に出生した。文武天皇、持統天皇などの諸帝に仕え、吉野(奈良県にある桜の名所)への行幸に扈從し、公宴の席にて歌を詠んだ。その後、播磨(現在の兵庫県)の国守に転任し、石見の高角山のふもとで没した。ここで詠んだ「山月」の歌は、辞世の作となった。石見の国人は、鴨島に神社を建てて人麻呂を祀ったが、風波により鳥は水没した。そこで神社を高角山に移して、柿の木を植えて神籬(神の宿る処)とした。その柿の実は、筆の先端のような形をしている。石川および吹上の浜は、人麻呂ゆかりの地である。

以下、詩の内容を解説しよう。首聯には真福寺の立地について説いている。鶴山は現地を流れる石川(高津川)を榎で東から西に渡り、柿本社が建つ古

い丘に登った。そこからは、海風が吹きつけること

によって造成された白い砂の中洲が見えるという。

ここで鶴山が回想したのは、人麻呂にまつわる事蹟であり、それは領聯から頸聯にかけて述べられる。

第三句は題注にも見える天皇の吉野行幸に扈從し、桜の花を愛でたことをいう。『古今和歌集』の仮名

序には、「春の朝吉野の山の桜は、人麿が心には雲かとのみなむおほえける」とあり、これを踏まえる。

「蹕」は乗り物のことで、ここでは天皇の御輦を指す。第四句の「明石の舟」は、『古今和歌集』巻九所収の人麻呂作とされる次の歌を踏まえる。

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞおもふ

(作品番号409)

朝霧にかすむ明石浦の岸辺より漕ぎだした、舟の行方を思うという内容である。この歌は『万葉集』には見えず、人麻呂作とは断定できないが、鶴山は人麻呂の作と見ていたはずである。

続く第五句に鶴山は、高角山の上に有明の月は見えるが、人麻呂の姿はないと詠む。題注に「山月の詠、絶筆と為る」と記されているため、人麻呂の辞世の歌を意識していることがわかる。『万葉集』の人麻呂の作で、辞世の歌にあたるのは次の一首である。

鴨山の岩根しまける我をかも知らにと妹が待ちつつあるらむ

(作品番号223)

人麻呂を待ちわびる妻を思つて詠まれたこの歌には、「柿本朝臣人麻呂の、石見国に在りて死に臨みし時に、自ら傷みて作りし一首」の詞書がある。だが、この歌には「月」が詠まれておらず、鶴山がいうところの「山月の詠」とは内容が合わない。合うのは次の一首である。

石見のや高角山の木の間より浮世の月を見果つる哉

(新井白蛾『牛馬問』巻二、「人丸辞世」)

これは、『牛馬問』(宝暦六年刊)のほか、大典頭

常の『柿本人麻呂事跡考』(明和九年刊。以下、『事跡考』と略記)にも記載されている。大典の注に、「コノ歌八万葉集ニノセス、人丸家集ニ出テ、世ニアマ子ク知モノナリ」とあり、当時は人麻呂の歌として、広く知られていたことがわかる。早くは室町時代の歌僧正徹の歌論書『正徹物語』や、一条兼良の作と伝えられる『本朝語園』に見える。ただ、上田秋成の『歌聖伝』(天明五年成立)や、尾崎雅嘉の『百人一首一夕話』(天保四年刊)をはじめ、江戸時代中期から現代に至るまで、人麻呂の作であることは疑問視されている。

ところで、『事跡考』の末尾に附されている「正一位柿本大明神祠碑銘并序」は、明和九年(一七七二)に津和野藩七代藩主亀井矩貞の依頼を受けて大典が撰文し、真福寺に立てられたものである。これに先立ち、当地には人丸の歌碑も有った。前出、新井白娥の『牛馬問』に、「右の和歌、今も人丸寺に有といふ」とあることからそれがわかる。つまり鶴山は、現地でこれらの碑文を見て、第五句に「高角山の月」を詠んだと考えられる。

題注と第六句に取り上げられている「鴨島」とは、水没したとされる旧高角山の別名である。大典は『事跡考』に『万葉集』の人麻呂辞世歌を引き、「カモヤマハ高角山ノ一名、又鴨嶋トイフ」と注し、その碑文に次のように記している。

神龜元年甲子三月十八日、高角山に卒す。終わるに臨みて歌有り、山間の月、溘焉(あわただしいさま)として別れを為すを嘆ずと云う。国人、為に廟(神祠)を厥の地に立て、人丸寺を置きて、祀を掌らしむ。其の山、海上に横出し、民、之れに邑して頗る庶し。万寿三年丙寅五月、海騰がり山崩れ挙げて皆な湮み没す。(以下略)

(「正一位柿本大明神祠碑銘序」、原漢文)

人麻呂が急逝した高角山(鴨山・鴨島)は、海辺に突き出ており、土地の人が村を作り集住していたが、万寿三年(一〇二六)に起きた地震により海中に没した。省略部分には、次のようなことが記されている。高角山が海に沈んだ後、人麻呂を祀る寺を海辺に建てたが、水災を避けるためにこれを内陸に遷し、その地に高角山と名づけて旧に復した。鶴山はこの故事を踏まえて、人麻呂が死去した鴨島は見えず、波間に鴨が浮かぶだけだと詠んだのである。

第七句は、第六句に人麻呂終焉の地である旧高角山・鴨島が現存しない、と詠んだのを承けて、人麻呂の遺蹟を探し求めたいが、それは困難であるゆえにためらわれるという。そして第八句に、当地の柿の実の筆の先端の形を真似ていると詠み収める。柿の実はこのことは大典の碑文にも見えるため、これを踏まえて、人麻呂を偲ぶ気持ちを表したのである。

鶴山が『万葉集』所収の歌ではなく、当時流布していた人麻呂辞世の歌の内容を漢詩に取り入れたのは、意外なことである。しかし、彼が真福寺に立てられた石碑を見て、人麻呂が「山間の月」を眺め、あわただしくこの世を去ることを嘆いたと追想したのであれば、それは当然のことであろう。また、鶴山の詩を読むと、彼は和歌に関する知識も有しており、漢詩以外の韻文にも関心を寄せていたことがわかる。人麻呂を偲ぶゆえである。

さて、天明六年(一七八六)五月七日、鶴山は長い旅を終えて佐賀に帰国し、登城して帰藩を報告した。その数日後、男児森松の誕生を迎えた。森松は鶴山の死後、君命により文橋と名を改める。後の石井忠辰である。『北海観風草』は、彼の出生を詠む「帰藩後数日、挙男(帰藩後、数日にして、男を挙ぐ)」(作品番号628)を以て終わる。

鶴山に男児が生まれたことは、主君にも報告され

たと見え、鍋島治茂に「賀石仲車挙男(石仲車の男を挙ぐるを賀す)」(『維適園別集』巻四)がある。主君より賀詩を寄せられたことは、鶴山にとって男児出生にとりも慶事であったことだろう。

最後に、拙稿を六回にわたって掲載していただいた本誌に、心より感謝申し上げます。

【注】

(1) 矢富熊一郎『柿本人麻呂と鴨山』(益田市郷土史矢富会、一九六四年)、二八六―二八八頁を参照。

(2) 『古今和歌集』からの引用は、佐伯梅友校注『古今和歌集』(岩波書店、一九八一年)による。

(3) 原文の引用は、佐竹昭広等編『万葉集』(二)『岩波書店、二〇一三年』による。

(4) 国文学研究資料館蔵。本書は同館の「国書データベース」にて公開されている。

(5) 『柿本人麻呂事跡考』および「正一位柿本大明神祠碑銘序」の本文は、九州大学所蔵本による。同書も前出の「国書データベース」にて公開されている。

(6) 『益田市誌・上』(益田市史編纂委員会、一九七五年)、「柿本神社の「神祠碑」」(八七三頁)を参照。石碑は柿本神社の境内に現存する。

(7) 『北海観風草』中に、「五月初七日帰藩、朝廷行飲至之礼、微臣亦与焉、恭誌鄙誠(五月初七日に帰藩す、朝廷飲至の礼を行い、微臣も亦た焉れに与れば、恭んで鄙誠を誌す)」(作品番号567)と題する七律がある。

草場船山に学んだ鹿島藩士八沢棗之進の生涯

鹿島市民図書館学芸部 高橋 研一

霊山護国神社に祀られる唯一の佐賀人

幕末期における国家の舵取りをめぐる新政府と旧幕府の対立は、慶応四年(一八六八)正月に軍事衝突へと発展し、戊辰戦争に突入した。江戸城が開城し、戦争の帰趨が明らかになった同年五月、明治天皇はペリーが来航した嘉永六年(一八五三)以来、国事に斃れた諸士と草莽有志の忠魂を祀るため、京都の東山に招魂場を創るように命じた(現在の霊山護国神社)。

霊山護国神社の墓所には高杉晋作・坂本龍馬・木戸孝允など著名な幕末の志士が祀られるが、その中に佐賀県の人物がたった一人だけ祀られている。それが鹿島藩士八沢棗之進である。

鹿島市では、明治維新一五〇年記念事業として五冊の書籍を刊行したが、その第一冊目として刊行した『「再発見」鹿島の明治維新史(二〇一八年)』において、棗之進を取り上げた。その後、鹿島でも棗之進に対する関心が高まり、令和四年十一月には子孫の手により、泰智寺(鹿島市浜)にある棗之進の墓の移設工事が行われ、現在は看板も建てられている。

『「再発見」鹿島の明治維新史』執筆に際しての史料調査の過程で、棗之進が草場船山に学んだこと、多久市郷土資料館の所蔵する草場家文書の中に棗之進に関する史料が含まれていることを確認できた。

そこで、今回は船山に学んだ棗之進が、佐賀県唯

一の志士として祀られるまでの短い生涯を紹介する。

草場船山との出会い

棗之進は、天保十年(一八三九)に鹿島藩医八沢仲安の長男として生まれ、元龜と名付けられた(本稿では棗之進で表記を統一する)。当時の医学書は漢文体で記されているため、家業継承のためには基礎教育として漢文の素養が不可欠であった。

そこで、嘉永五年(一八五二)、十四歳になった棗之進は佐賀の儒学者武富圮南の塾に遊学する。さらに、翌嘉永六年八月には唐津藩の松本退蔵が鏡村で開いていた塾(帰厚舎)に移った。そして、その年の十二月、棗之進は船山のもとを訪れ、入門したのである。

船山は嘉永四年に家塾千山楼を開き、東原庵舎と家塾の双方で後進の指導に当たっていた。しかし、安政二年(一八五五)四月より江戸・京都に遊学するため、船山は多久を離れている。安政四年に多久に戻り、再び東原庵舎の教授となる。

船山が帰郷した安政四年の五月、棗之進は鹿島藩士平尾孫九郎に連れられて、田中拳十郎・大隈元太郎とともに船山の家塾に再び入塾する。棗之進は船山が多久を離れている間は別人の塾に詰め、船山が多久に戻ってきたため、再び船山塾に戻ったと考えられる。

草場家文書に「撰名稿」と題する史料がある。これは船山が門弟に与えた諱(元服後の実名)を書き留めたもので、この中には棗之進に「本保」という実名を与えたことが記されている。鹿島藩から多くの若者が船山塾に入塾しているが、船山が諱を与えたのはたった二人で、船山が棗之進を高く評価していることがうかがえる。なお、墓碑銘に記されている棗之進の諱は「之保」である。

船山のもとを去る棗之進

棗之進は安政四年(一八五七)五月から船山のもとで学んでいたが、その別れは突然やってきた。安政五年十月、鹿島藩は、船山のもとにいた棗之進と織田玄仙(鹿島藩医)に対し、佐賀藩の蘭学寮に入塾し、蘭学と医学を学ぶことを命じたのである。この蘭学寮は、嘉永四年(一八五二)に佐賀藩が蘭方医学を教授するために設置したもので、安政五年には片田江に移転し、好生館と改称する。

これを受けて、船山が詠んだ漢詩があるので紹介する。

贈別八沢・梅崎二子辞敬塾、入治下蘭学寮、蓋奉命也、

蘭室新成城北隅 移裁百卉無遺株
怕君每見秋風起 却向西山憶旧区

此孝也、使封内諸医、爰漢帰蘭、二子之行者、不积然者、故及詩中、

この漢詩は、安政六年に船山が詠んだ漢詩をまとめた「己未山中可楽第一編」に収められている。漢学者である船山にとって、漢学から蘭学へと変化させる佐賀藩の方針は到底承服できるものではなく、

門弟二人の複雑な立場を理解しながらも、非難する気持ちを抑えきれなかったことがあらわれている。なお、棗之進とともに蘭学寮入りを命じられた人物について、鹿島藩の記録では織田とするが、船山は梅崎としている。

ただし、これによって、両者の関係が断絶したわけではなく、折に触れて漢詩文の贈答を行うなど、師弟の交流は続いていった。

江戸へ登る棗之進

蘭学寮に入学した棗之進は、日蘭辞典の購入代を鹿島藩から拝借し、蘭学稽古に大いに励んだ。その成果を高く評価した鹿島藩は、棗之進に多大な期待を寄せ、江戸での医学稽古を命じた。

棗之進が江戸に登った時期の鹿島藩日記は失われていたため、これまで明確な時期は不明であった。しかし、江戸に登る棗之進に送った船山の漢詩（「送別八沢医英鹿島人、称元亀之江戸」）が見つかった（「辛酉山中可楽第三編」）。船山の漢詩文集は日付順で排列されているため、棗之進が文久元年（一八六一）の九月から十月の間に江戸に出立したことがわかったのである。

棗之進は江戸での医学稽古に専心するとともに、折に触れて詠んだ漢詩を船山に送り、批評を乞うていた。その際、船山が棗之進に送った「題八沢元亀詩巻後、寄其在江戸」と題する漢詩も遺されている（「山中可楽第四編」）。

元治元年（一八六四）、参勤交代で江戸に登ってきた鹿島藩主鍋島直彬は、棗之進の素質を高く評価し、「去医帰儒」、すなわち医業を継ぐのではなく、直彬

や鹿島藩に役立つ有為な人材となることを命じた。これによって、棗之進はこれまでの元亀という名前を棗之進に改め、新たな人生を歩み始めたのである。

水本成美との出会いと鹿島藩脱藩

棗之進は元治元年、鹿島藩士原忠順の推挙により、江戸の儒学者水本成美塾での文学稽古を命じられた。成美は昌平黌の舎長を務めたほど有名な儒学者であった。棗之進は成美を慕い、成美も稽古に励み、上達の早い棗之進を可愛がった。その後、成美は薩摩藩に招聘されるが、棗之進も鹿児島まで同行し、師匠の事業を手伝っている。その関係から、倒幕の姿勢を明確に示した薩摩藩士との関係を深め、その影響を強く受けるようになった。

こうした棗之進の状況を不安視したのか、鹿島藩は棗之進に帰藩を命じ、藩校弘文館の訓導・句読師に任じた。

ちょうどその折、戊辰戦争が勃発した。鹿島藩主直彬は、新政府側に付くように佐賀藩を説得し、佐賀藩と鹿島藩の軍勢を率いて上京する。しかし、佐賀藩の策謀により、鹿島藩は京都で長崎警備を命じられた。直彬は憤懣を抑え、戊辰戦争の最前線ではなく、長崎に踵を返した。

長崎に下る鹿島藩の一行から忽然と姿を消した人物がいた。棗之進である。慶応四年三月、棗之進は病氣療養の名目で滞在していた大坂を脱出し、京都へ向かった。鹿島藩は棗之進の行為を脱藩と認定し、直ちに探索し、居所を突き止めた。父仲安も棗之進に帰藩を促す書簡を送り、在京の鹿島藩士も棗之進と面談している。

所在が判明している棗之進はなぜ直ちに身柄を確保されなかったのであろうか。

その答えは、棗之進が父仲安に送った返書の中にある。棗之進は帰藩を懸命に訴える父に対し、藩法に背く行為でも、いずれは正当に評価される行為なので、しばらくは耐え忍んでほしい、朝廷の周旋によって帰藩できるので、心配ないと述べている。

さらに、棗之進は自分が帰藩すれば、直彬にも嫌疑がかかると半ば脅迫している。棗之進を脱藩に誘引したのは恐らく薩摩藩士で、薩摩藩が鹿島藩を旧幕府に同調する勢力として弾圧する可能性をちらつかせているのである。

棗之進が成美を介して薩摩とつながっていることは周知の事実であったため、棗之進の脅しは効果的であった。

鹿島藩が手をこまねいている間に、棗之進は納富郁太郎と改名し、北越戦線に出征する嘉彰親王の軍勢の軍曹兼輜重（小荷駄方）に任命された。戦地では、兵糧や弾薬の運搬・補給、金銭業務、病院の設置・病傷者の後方移送など、最前線を支える重要な役割を果たし、その功績は高く評価され、戦後に金子二五〇両を下賜されている。

戦争終結後、棗之進は明治元年（一八六八）十二月に帰京した。恩師成美と再会の喜びを分かち合ったが、すでに不治の病が進行しており、明治二年三月十九日に三十一歳の生涯を閉じたのである。

この時期の鹿島藩の動向を含め、棗之進に関心を抱かれた方は『（再発見）鹿島の明治維新史』を手にとっていたら幸いである。

太古のブランド石材―多久のサヌカイト―

佐賀県文化課文化財保護・活用室

越知 睦和

はじめに

多久市と大町町にまたがる鬼の鼻山から産出する安山岩(サヌカイト)は、旧石器時代から縄文時代にかけて石器の石材として利用されていた。特に多久三年山遺跡と茶園原遺跡は、大形の槍先形尖頭器が大量に出土しており、大規模な製作址遺跡として有名である。

今回は、この多久の安山岩(サヌカイト)に焦点を当て、多久三年山遺跡と茶園原遺跡の発掘調査成果を紹介し、これまでの研究成果から多久産安山岩(サヌカイト)の流通を考えてみたい。

一 鬼の鼻山の安山岩(サヌカイト)

多久市の南部にそびえる鬼の鼻山は標高約四三五m、山頂から南側を望むと、有明海と遠く雲仙まで見通すことができる。生成年代は約八百万年前であり、岩石の分類としては安山岩であるが、非常に質が良いことから、香川県の五色台等で産出するサヌカイトと似ていることから、「多久のサヌカイト」と呼ばれている。天ヶ瀬ダムから少し下ったあたりに露頭がある。

この「多久のサヌカイト」(以後、安山岩と言う)は旧石器時代から縄文時代にかけて主要な石材の一つとして利用されていたことで有名である。鬼の鼻山北麓では、この安山岩で石器を製作した遺跡が多数存在する。次節ではこれらの遺跡群で最も有名な多久三年山遺跡と茶園原遺跡について概要を述べる。

二 多久三年山遺跡について

多久三年山遺跡は佐賀県多久市多久町字唐堀一六八二番にあり、三年山は俗称でる。鬼の鼻山北麓に

伸びる斜面地が幾重もの小谷を形成しながら牛津川に接する。これらの北端に見られる舌状台地の上に立地している。

調査は一九六〇年に明治大学が、二〇〇一年に多久市教育委員会が行っており、特に明治大学の調査成果は当時、日本考古学協会の総会で報告される等全国の注目をあびた。大形の槍先形尖頭器が多数出土した事や、縦長剥片とその石核が確認されたことは、当時としては希少で重要な発見であった。また、縦長剥片が連続的に剥離されることを石刃技法というのであるが、その証拠である石刃と石核の接合資料が確認されたことは、非常に珍しいことであった。

三 茶園原遺跡について

茶園原遺跡は三年山遺跡の東方約1kmの距離を隔てた場所に位置している。調査は三年山遺跡と同じ一九六〇年に明治大学が行っており、また、多久市教育委員会によって一九七八年、一九七九年、一九九六年の計三回調査が行われた。明治大学の調査と合わせて計二十箇所調査区が発掘され、その結果、写真1のような大形の槍先形尖頭器(写真1右側は全長三十一・七cm)とそれに関連する剥片類が大量に出土したことである。槍先形尖頭器は約六千点、またその尖頭器に関連する剥片に至っては数十万点と言われていることから、この地が縄文時代草創期から早期にかけての一大製作址遺跡であったことを物語っている。この様に大形の槍先形尖頭器を集中して製作する遺跡は他に類を見ない。

では、この様な槍先形尖頭器が他県でも見られるのか、次節で見えていきたい。

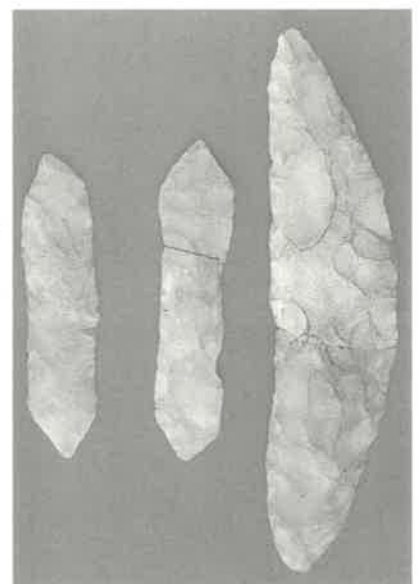


写真1 茶園原遺跡出土の尖頭器

四 九州における槍先形尖頭器の分布

九州における槍先形尖頭器の出土事例について概観すると、福岡県では大原D遺跡や松木田遺跡等二十四遺跡四十六点が確認されている。また、長崎県では茶園遺跡や岩下洞穴等十八遺跡で七十七点が確認されている。佐賀県では多久以外において、中尾二ツ枝遺跡や竹木場前田遺跡等十一遺跡で五十六点が、熊本県では柿原遺跡や瀬田裏遺跡等十八遺跡で七十九点が、大分県では二日市洞穴や北平川遺跡等十二遺跡で三十八点が、宮崎県では辰之元遺跡や上猪ノ原遺跡等三十一遺跡で五十五点が、鹿児島県では園田遺跡や帖地遺跡等十二遺跡で三十六点が確認されている。

総数が三百八十七点となり、多久の茶園原遺跡で確認されている六千点に遠く及ばない。しかもこの点数は安山岩製以外のものも含んでいるため、実際はもっと少ない。しかし、茶園原遺跡で出土している大形の槍先形尖頭器と形態的に類似する資料も複数確認されている(図1)。

五 多久産サヌカイトの流通を考える

前節で九州各地における槍先形尖頭器の出土事例について述べたが、この中でも特に大分県北平川遺跡と熊本県柿原遺跡、鹿児島県園田遺跡では大形の

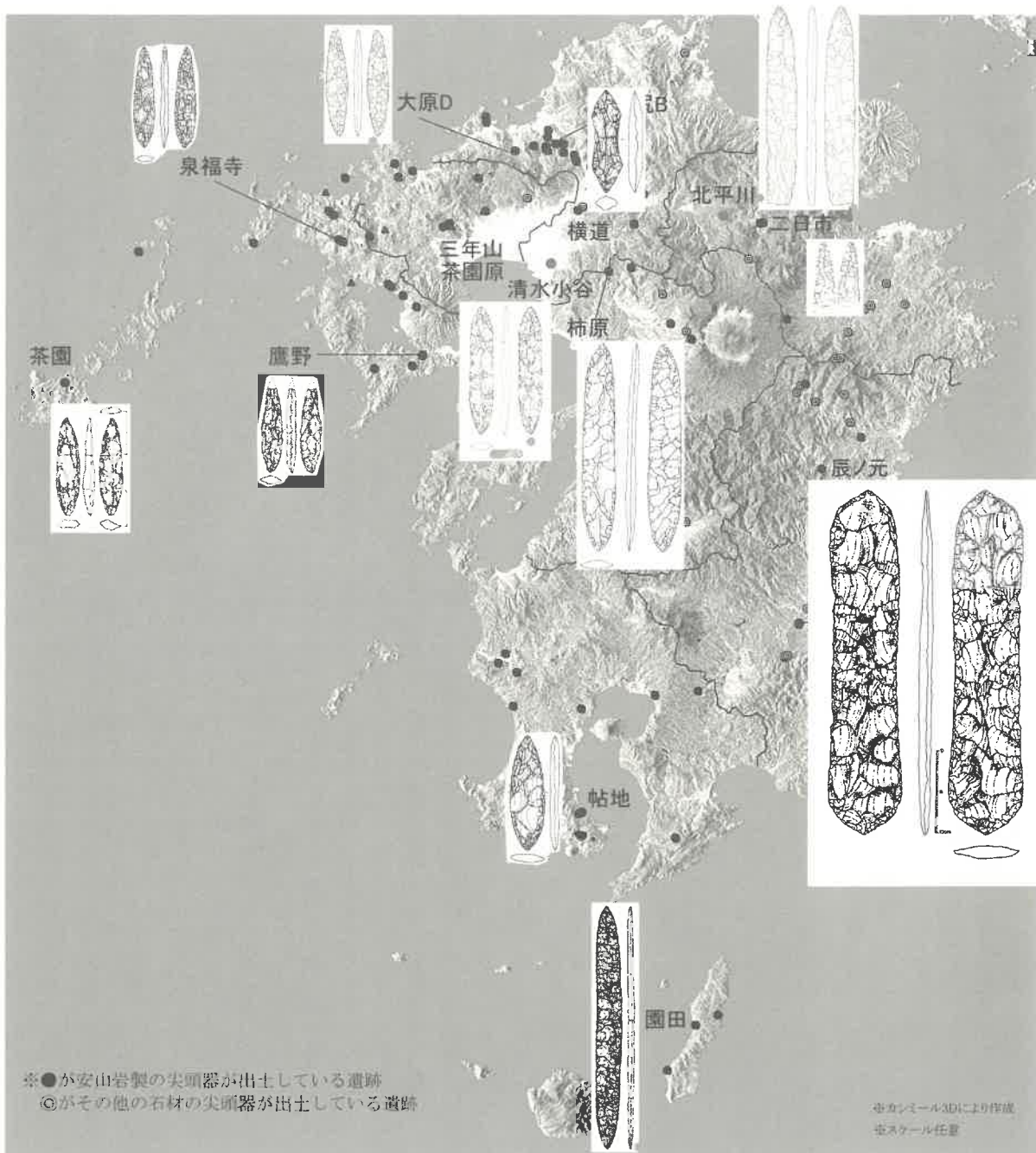


図1 九州における槍先形尖頭器出土遺跡分布図と主要遺跡出土尖頭器の実測図

安山岩製槍先形尖頭器が意図的に埋め込まれたような出土状況をしており、しかもわざと複数に折っていると考えられ、実用品というより祭司的な様相を呈している。鹿児島県園田遺跡に至っては、所在地が種子島とあって、縄文時代草創期から早期の頃には既にこの様な尖頭器が広域に流通していたことを示している。

この様な状況から、当時すでに九州内でのネットワークが存在していたと考えられる。そして、これらの槍先形尖頭器が多産サヌカイトで製作された可能性が高く、まさに太古のブランド石材であったと言えるのではないだろうか。しかし、これはあくまでも考古学的な分析のみで可能性が高いということであり、確証を得るには、客観的なデータを元に分析する必要がある。

ではどうしたら客観的なデータが得られるのか。最近になって、有効な分析方法が見つかったので少し紹介したい。石材の産地同定といえば蛍光X線分析が有名であり、黒曜石では一定の成果がある一方で、安山岩は風化面が邪魔して測定値が安定しなかったため、避けられてきた。しかし、波長分散型と言われる蛍光X線分析装置を使うと風化面があっても各原産地の数値が分かれることが発見されたのである。この方法によって今後分析データを蓄積していくことが重要になってくると思われる。この装置は分析できるサンプルの大きさに制約があるが、データを蓄積しつつ、九州各地の類例の増加を把握することで、多久のサヌカイトがどの程度流通していたかを解明することができると期待している。

多久家文書

『水江事略』(翻刻文)紹介 13

公益財団法人孔子の里 理事 服部政昭

水江事略卷之六

安順公譜之上

天正十七年己丑ヨリ
文祿元年壬辰ニ至ル

天正十七年己丑

御年二十七歳

今年我公圖書頭茂富公(年五童名慶法師初ノ名孫四郎)ヲ養テ御子トセラル慶闇尼公ト共ニ水江ノ館ニ居住セラル實ハ後藤家生ノ息ニシテ御母ハ長信公ノ御息女(法名真光院)茂富ハ公ノ御甥ナリ

同年諸國檢地有テ始テ田島ノ成ヲ定ム御國モ直茂公ノ命ヲ受テ檢地有爰ニオヒテ檢者石井清五左衛門尉野村右馬允副嶋兵左衛門尉武雄ヨリ多久ニ來ル多久領ヲ八ツ成ニ定メテ佐嘉ニ赴ク時ニ長臣南里三郎左衛門尉吉岡平左衛門尉相謀テ三使ヲ追フ一人ハ先ニ行テ西川ニ到リ三使ヲ空閑右馬助力宅(空閑ハ吉岡カ姉婿ナリ)一説ニ三岳寺ノ亭共(ニ招キ入今一人ハ酒肴等ヲ用意シ急キ跡ヨリ追付テ饗應ス酒酣ニシテ兩人三使ニ向テ曰ク抑我多久ノ領ハ其土地深山幽谷ノ間ニ狹マリ元ヨリ良田少ナシ然ルニ貴方等里目一通ヲ巡見シテ八成ニ定メラル、誠ニ以テ當ラサル所ナリ其通り決定スルニ於テハ六郎次郎以來軍役勤メ難シ願クハ四ヲ減シテ四ツ成ニ定メ玉ヘカシ臣等偏ニ是ヲ歎クト再三詞ヲ尽セシカハ石井氏曰我等曾テ依怙ヲ致サス何ソ當領ニ限テ不相當ノ成ヲ定ンヤ然ハ今更貴邊等ノ言葉ニ任セ難シト云々南里吉岡曰誠ニ今貴邊方ニ對シ彼是ト申述ル御難題トモ云ヘキ歎マツマツ一獻傾ケ玉

ヘ我々兩人直茂公ノ御目通り叶ハサルモノニモ候ハス近日御城ニ上リ直茂公ニ直々ニ申上所存ヲ達シ申ヘシト云三使是ヲ聞テ云貴邊等直訴ノ事ハマツマツ御見合セ有ベシ我々歸宅ノ上猶又勘弁イタシ返答ニ及ヘシトテ頓テ佐嘉ニ歸リ其翌日ニツヲ減シテ六ツ成ニ定メ多久ニ申越サル然レトモ山野ノ田島ニ割付シニ猶々不足ナリシカハ此上ハトテ兩人佐嘉ニ到リ直ニ直茂公ニ訴フ御邊等カ申所一々兼届タリ其儘差置難キ事ナレトモ檢者等ノ定ル所今更是ヲ變シ難シ且ハ脇々ノ支ヘナリ如何ハセント御思案ノ上暫シテ仰セラル、ハ我熟考スルニ諸山ハ皆山成ヲ掛シムルトイヘトモ多久領ハ山成ヲ除キ先規ノ如ク多久ノ領地トセン然時ハ物成ヲ減スル同然ナラズヤ吾子等はニテ納得セヨト有シカハ兩人ハ有難シト領掌シ御札ヲ遂テ歸ル是ニ依テ我領内ノ山野ハ長信公御切取ノ時ヨリ以來長ク山成ナシニシテ領セラル、所ナリ吉岡ハ前廉造酒正タリシ時ヨリ御使トシテ佐嘉ニ到リ毎度直茂公ニ御目通ナセンモノナリ南里ハ又御一族ノハシナリ此故ニ兩人トモ御懇意ヲ蒙ル事年久シ

同十八年庚寅

御年二十八歳

春松浦名護屋ノ御城御普請始ル異國御征伐ノ為ナリ課役ニ依テ我兵モ諸家ト共ニ是ヲ勤ム龍造寺又八郎久重奉行タリ

同十九年辛卯

御年二十九歳

名護屋ノ御城御普請未タ終ラズ

文祿元年壬辰

御年三十歳

豊臣殿下朝鮮ヲ征セラル加州太守直茂公先陣ノ命ヲ蒙ラレ兵一萬二千餘騎ヲ率ヒテ御渡海アリ(直茂公ハ先御馬廻リ斗リニテ三月三日佐嘉御出馬三月廿日ヨリ名護屋御出船)我公(此時六郎

次郎家久公)此時御病氣ニテ御供相叶ハレス頓テ御跡ヨリ御渡海ナリ

四月我公手勢八百餘騎ヲ率ヒテ多久ヲ發セラレ即日伊萬里津ニ到リ玉フ相從フ輩副嶋助五郎小田太郎四郎龍造寺左衛門太夫堤太郎九郎副嶋長門守同彦三郎(己上與カ)親族ニハ犬塚半左衛門尉家長ニハ南里三郎左衛門尉吉岡平左衛門尉原千右衛門尉(旗奉行)徳永八郎左衛門尉田代次郎左衛門尉(己上二人銃兵百人ヲ掌ル)峰權左衛門尉西岡覺右門尉(二人弓兵百人ヲ掌ル)龍造寺七郎兵衛尉南里與左衛門尉蒲原清左衛門尉石井源左衛門尉同三右衛門尉村山孫左衛門尉福地右衛門尉同小右衛門尉同内藏助梶原喜兵衛同三郎太郎徳永二左衛門尉同金右衛門尉木下七郎右衛門尉諸田慶順齋相浦三介野田清兵衛尉庭木右馬允成富與六左衛門尉木下久兵衛尉江副伊右衛門尉同二郎兵衛尉徳久太郎兵衛尉山田新左衛門尉堤平兵衛尉中嶋右馬允河浪久順齋伊藤惣左衛門尉早田清右衛門尉前田織部允公文八左衛門尉成富又左衛門尉藤崎九郎兵衛尉福地源右衛門尉富善左衛門尉西四郎右衛門尉中西助内寺町勤兵衛尉本田政兵衛尉中村十郎兵衛尉於保十郎左衛門尉岩本久菴小野三左衛門尉土橋九藏吉野九兵衛尉同四郎兵衛尉中園千左衛門尉武富弥三同助左衛門尉河崎七右衛門尉新郷七右衛門尉江原軍助峰七右衛門尉佐間宗助瀬戸口十郎兵衛尉峰宗七郎森與四兵衛尉小副川兵部左衛門尉江副新太郎同新左衛門尉森三五左衛門尉飯盛弥三次郎中嶋太郎左衛門尉以下士卒都テ八百餘人四月二十一日伊萬里ヨリ御出船二十九日朝鮮釜山浦ニ御着五月十七日王城ノ南大門ニ到テ直茂公ニ謁セラル朝鮮國王ハ出奔ス爰ニ原市郎右衛門(筑後一木村原ノ十郎惠俊力孫)病氣ニ依テ釜山海ニ殘ル又西四郎右衛門ハ(始兵三郎)御使トシテ半途ヨリ釜山浦ニ歸ル爰ニ以テ兩人後レテ王城

二赴ク敵ノ殘黨路邊ノ山林ニ伏隠レテ矢ヲ射懸ル雨霰ノ如シ原西並從者身命ヲ顧ミス奮ヒ戰テ敵餘多ヲ討捕ルトイヘトモ多勢ニ無勢四郎右衛門以下四人矢ニ當テ死ス市郎右衛門ハ五カ所ノ疵ヲ被リ存没不定ナリ時ニ一人ノ女性アリ小豆飯ヲ捧ケテ是ヲ與フ市郎左衛門是ヲ食シテ口中忽チ和キ氣分モ又快シ是ニ依テ礼謝セントスレバ忽チ見ヘスツクゾク思案スルニ異邦ノ女今何ノ好ミ有テ我ニ深切ニ小豆飯ヲ與ンヤ我常々愛宕勝軍神ヲ信仰ス彼御供物ハ小豆飯ナリ今是ヲ與ヘ玉フハ愛宕ノ擁護疑ナシト心肝ニ銘シテ斯ル所ニ浮田秀家ノ家臣壹岐守某来リ合セ手負ノ体ヲ見テ乗替ノ馬ニ助ケ乗セ醫者ヲ付テ王城ニ伴フ我公深ク其志ヲ謝セラル直茂公ヨリモ又使者ヲ以テ是ヲ秀家郷及壹岐守ニ謝セラル

五月軍ヲ分テ八道ニ打入ル直茂公ト清正ハ咸鏡道ヲ司ラレ諸勢ヲ率テ開城川ニ到ル敵船數百艘ヲ浮ヘテ川ヲ守ル直茂公ノ先手鍋嶋平五郎茂里船四五艘ヲ以テ是ヲ追散シ又敵船ヲ奪取渡シ船トシテ味方ヲ渡ス然レトモ両手ノ軍兵多勢成ニ依テ或ハ馬ヲ以テ渡シ又ハ游キ渡ル輩溺死スルモノ若干ナリ我公ノ長臣南里吉岡衆兵ヲ勵マシテ河ノ上下ヲ渡シ多勢ハ其間ヲ渡ラシム故ニ我軍水波ヲ凌ヒテ岸ニ著ク吉岡カ家人形左衛門河中ニ沈テ死ス

加藤鍋嶋両手ノ軍開城府ニ留ル五日人馬ヲ休メ進テ咸鏡道ニ到ル清正朝鮮ノ王子兄弟及大臣等ヲ橘州(一作吉州)ニ捕ヘ安邊ニ歸ル家臣等ヲシテ橘州城(元喰喰ノ界ニシテ咸鏡道ノ山ナリ)ヲ守ラシメ其次ノ諸城ハ両手ノ軍勢是ヲ守ル其城々配城金山藏所ニハ鍋嶋新左衛門尉與私洪原城ハ成富十右衛門尉與私咸興ノ城ハ直茂公ノ御本陣定平ノ城ハ鍋嶋弥平左衛門尉與私馬場清兵衛尉内田時化三郎永興ノ城ハ龍造寺七郎左衛門尉龍造寺彦右衛門尉松浦太郎高原ノ城ハ鍋嶋平

五郎與私文川ノ城ハ龍造寺六郎次郎神代喜平次徳原ノ城ハ後藤善次郎田尻鑑種安邊ノ城ニハ清正是ニ居ル各在城シテ郡中ノ貢物等ヲ取納ム咸鏡道ニテ六伯ト称スルモノ有是ハ郡中ノ諸事ヲ執行フ役人ナリ我家臣吉野九兵衛一邑ノ代官トシテ貢稅納取ノ事ヲ司ル

龍造寺又八郎久重ハ普請奉行トシテ久敷名護屋ニ在リシカ普請事終テ多久ノ殘兵ヲ率ヒテ朝鮮ニ渡海ス

久重ノ家臣相從フ者田原彦右衛門山川九郎左衛門下村忠右衛門坪上忠左衛門吉岡權兵衛平嶋兵部左衛門平石左馬允秀嶋左衛門榎瀬五右衛門大河内五右衛門小山清左衛門梶原助右衛門野口千右衛門菴七郎左衛門船山大助山口宗左衛門平古場九郎兵衛ヲ始トシテ數十人は二付從フ

六月十五日久重熊川ニ到リ船中ニ於テ卒ス七月下旬我公文川郡ニ在テ是ヲ聞アタラ股肱ヲ失ヒシト甚歎惜シ玉ヒシト云

直茂公譜ニ翌文祿二年正月吉州百日籠城ノ兵ヲ救ノ為直茂公ヨリ遣ハサル、三將ノ内一人ハ龍造寺又八郎久重ト有同十三日吉州ニテ清正ニ先鋒ヲ申乞シモ右三將ナリ如何考ヘシ

夏秋ノ比我家臣河原左馬允同奎之助長信公ノ御使トシテ朝鮮ニ赴キ釜山浦ニ到ル本陣ニ後レタルモノ百餘人ヲ催シ聚メテ是ヲ伴テ文川ニ赴ク其路次小早川隆景ノ陣所ヲ過ル時ニ隆景人ヲシテ問ハシメテ云吾子等ハ何國ノ家人ナルヤ龍造寺ノ臣ト答フ爰ニ於テ隆景河原ヲ召シテ告テ曰御邊龍家ノ臣ナラハ我御邊ヲシテ鍋嶋直茂ニ申通ル一義有此度殿下名護屋ニ在陣マシマシ朝鮮ヲ征シ玉フニ近國ニ公領乏クシテ兵糧ノ運ヒ不自由ナリ仍テ龍造寺ヲ他國ニ封シ其領ヲ公領ニセラレントノ聞ヘ有是ハ近臣等一時ノ便宜ニ依テ執斗フ所トコソ存シ候ヘ然レハ縱令御奉書ヲ

賜トモ努々領掌アルベカラス御邊此事ヲ以テ直茂ニ達セラルベシトナリ夫ヨリ川原ハ急キ文川ニ到リ先我公ニ謁シテ後咸鏡道ニ行キ直茂公ニ謁シ隆景ノ傳言ヲ達ス

十一月上旬我公及神代大炊介家良(此時喜平次ト称ス)鍋嶋平五郎茂里一手一手ノ半ヲ分ケ是ヲ率テ咸鏡ニ到ル是ハ一揆等ノ蜂起ニ依テナリ同十一日(此戰直茂譜ニハ十日ト有)直茂公ノ一手長橋ヲ押渡リ西ノ方山内ニ赴ク三家ノ兵モ又是ニ次ク敵兵力ヲ盡シテ戰フトイヘドモ終ニ休ヘスシテ敗走ス直茂公ノ兵追討テ首千餘級ヲ得ラル三手の軍又三百餘人ヲ討取就中我公勇烈拔群ニシテ自ラ敵ニ當リ首數級ヲ得タリ家臣南里三郎左衛門相浦左近允(時二年十七三助ト称ス)主從僅三騎馬ニ鞭テ進ミ北ル敵ヲ追詰首若干ヲ討捕テ本陣ニ歸ル直茂公我公ノ功ヲ賞セラレ且南里相浦ノ勳キヲ御褒美有テ鞍馬ヲ賜フ

南里三郎左衛門賜フ所ノ鞍ハ子孫今ニ家ニ傳フ此時相浦カ乗ル所ノ馬ハ小河半内(直茂公ノ甥)ヨリ是ヲ得タリ半内ト左近トハ兼テ交リ深カリシ故ナリトソ

直茂公譜 中ニモ六郎次郎家久ハ南里吉岡ト唯三人追懸ル公ノ御案ノ如ク賊軍ヲ悉ク大山ノ麓ニ追詰タリ

其他我家臣武富弥三同助左衛門兄弟拔群ニ相働キ敵餘多ヲ討取弥三八討死シ助左衛門ハ疵ヲ被ル直茂公弥三カ手柄ヲ賞セラレ其弟喜之助ヲ御所望有テ御家臣トセラル助左衛門ハ公ノ御賞美ニ預ル梶原喜兵衛カ樸松本善兵衛烈敷戰テ敵二人ヲ討取其餘ノ軍兵思ヒ思ヒニ戰功ヲ顯ハシ當テニ討取敵百餘人ナリ討死ノ者又數十人江副新太郎副嶋次右衛門佗間宗助西山四郎左衛門上瀧孫左衛門木下七郎右衛門カ家樸林口甚五左衛門等ナリ其後咸鏡平均ニ依テ三將各本城ニ歸ル

(以下 次号に続く)

華表を仰ぐ

多久市郷土資料館長 藤井 伸幸

第二回 西多久町藤川内天満宮の鳥居

〔丹衷磨白石 華表柱青雲〕

藤川内天満宮は、多久市西多久町を東西に走る県道多久若木線から藤川内集落へ入り、約500m北に進んだ道路西側に位置しています。

『丹邱邑誌』(多久の儒学者深江順房が江戸後期に執筆編集した多久の地誌)によれば、「天満宮(神林菅公吉祥女菅公ノ世子君)藤河内村ニ在リ：社職女山七郎社神主武岡氏兼帯ス」とあります。

これによれば「天満宮には御神体として菅原道真、室の島田宣来子、世継ぎ菅原高祝が祀られ、藤河内村にある。：社職は女山七郎神社の神主である武岡氏が兼任している。」と記されています。

(正面右の柱に刻まれた銘文)

糞奉建立神門両柱

肥前州小城郡多久縣藤河

内村奉崇

天満大自在天神具来也尚矣

祭奠無怠 靈威惟新丹忱

懇禱則玄感妙應焉頃日里

人胥偕勦力恭建石華表以

旌明信敬酬 神德伏祈

府君武運與天地長久村民

福履同雲根堅固也矣



藤川内天満宮鳥居

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

糞(くそ)で神門(かみ)の柱を建立し奉(たてまつ)ります。

肥前州(肥前)小城郡(小城)多久縣(多久)藤河内村(藤河内)の崇(たか)め奉(たてまつ)る

天満大自在天神、其(その)来(き)たるなり。尚(なほ)きかな。

祭(まつり)奠(たてまつ)り無(な)くんば、靈(たま)威(い)は惟(ただ)れ丹(に)忱(じん)を新(あらた)にせん。

懇(こん)に禱(いの)らば則(すなは)ち玄(こゝろ)感(かん)妙(たみ)應(おう)あらん。焉(なほ)くんぞ頃(ころ)日(ひ)里(り)えん。

人胥偕に勦力し恭しく石華表を建てて以て明信と敬酬を旌し、神徳に伏して祈る。府君の武運は天地長久村民に與し、福履は雲根の堅固と同じうせんことを。

現代語訳の案は次のとおりです。

謹んで神門二柱を建立申し上げます。肥前州小城郡多久県藤河内村が崇拜する天満大自在天神(菅原道真が神格化された呼称)がお出ましになりました。何と尊いことか。祭奠を怠りなく行えば、神霊の御威光は真心を新たにし、懇に祈れば、神の感得(御加護)で応報があるだろう。どうして日々思い煩うことがあるうか。人皆共に力を合わせて恭しく石鳥居を建立し、もって信心と感謝を表し、神徳に伏して祈ります。府君(領主)の武運が天地長久、村民を助け、福祿(幸福と俸祿)は岩山のように堅固であらんことを。

(正面左の柱に刻まれた銘文)

銘曰

至哉大矣神

操節松高秀

丹衷磨白石

景福被河内

審永七歳舍庚寅二月十五日

大檀主多伊豫藤原茂文公

祠官

武岡□□貞則

村吏 石井九左衛門忠順

石工井田与四衛門

顯證見住桂堂圓昌敬題書

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

銘に曰はく

至れるかな大いなるかな神、千載斯文を煥らかにせん。操節は松のごとく高く秀で、徳香は梅のごとく遠く薫らん。

丹衷は白石を磨き、華表は青雲を柱えん。

景福は河内を被い、寓祥は府君に歸せん。

審永七歳舍庚寅二月十五日

大檀主は多伊豫藤原茂文公、祠官は武岡□□貞則、村吏は石井九左衛門忠順、石工は井田与四衛門。顯證見住の桂堂圓昌が敬いて書を題す。

現代語訳の案は次のとおりです。

(鳥居に刻み) 銘文として申し上げます。この上なく大いなる神は、千年にわたりこの文を照らし続けるだろう。節操は松のように高く秀で、徳香は梅のように遠く薫るだろう。丹心(真心)は白石を磨き、鳥居は青雲を支えるだろう。この上ない幸福が(藤)河内を覆い、もたらされた吉祥は府君(領主)の元に帰着するだろう、と。

(続いて)

歳舎は歳次と同じく干支の頭に付けます。宝永七庚寅(かのえとら)の年は西暦1710年です。檀主は檀那と同じく施主です。藤原茂文は多伊四代領主多伊茂文のことで、この鳥居建立の二年前には多伊聖廟を竣工させています。祠官(官司)は武岡貞則で、武岡家は代々西多伊七郎神社の社職でした。村吏(村役)は石井九左衛門忠順(詳細不明)、石工は井田与四衛門(詳細不明)です。顯證は現在の多伊町頭照寺にあたり、見住(現住)桂堂圓昌は『丹邱邑誌』に五世桂堂とあり、この人物が書を題したと考えられます。鳥居写真の額東(がくづか)には「天満宮」と刻まれています。

なお、鳥居紀年銘の宝永七年二月十五日に関し、次のような疑問があります。『水江事略』によれば「寶永七年庚寅四月御名伊豫ト改メラル」とあり、名前を伊豫に改めたのは、鳥居に刻まれた二月より約二箇月後という記載です。また、『御屋形日記』の同年三月二日の条に「村中で鳥居を寄進するため予定地の杉二本を伐採したいとの申し出があった」と記載され、この時点で鳥居は建立されていなかったことを暗に示しています。それでは鳥居銘文の二月十五日は何の日でしょうか、銘文の起稿日なのか。

(注) 漢文の書き下し文や現代語訳は、元県立高等学校長(匿名希望)の助言を得ました。

令和六年 春季積菜

日時..令和六年

四月十八日(木曜日)

場所..多久聖廟

執事、伶人入場 午前十時
 献官、祭官入場 午前十時二十分
 積菜(せきさい) 午前十時三十分
 十一時三十分



来訪・来信・雑録

- 10月7日 鶴山塾「古文書教室⑤」
(講師..舌間輝吉 多久古文書の村)
- 10月13日 鶴山塾「中国古典の扉⑤」
(講師..武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 10月14日 秋季積菜学校関係者事前練習
- 10月19日 秋季積菜総練習
- 10月22日 令和5年秋季積菜
- 10月27日 韓城中華人民共和国駐福岡総領事館政治部長ほか来訪
- 10月28日 愛知県東海市議会(新緑水クラブ)、行政視察来訪
- 10月29日 鶴山塾「はじめての短歌④」
(講師..角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 10月31日 草場佩川の会多久聖廟周辺石碑探訪
- 11月4日 有田町同朋保育園論語表読会
- 11月4日 鶴山塾「古文書教室⑥」
(講師..舌間輝吉 多久古文書の村)
- 11月7日 鶴山塾「中国古典の扉⑥」
(講師..武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 11月7日 (株)JA食糧さが合格祈願「縁起米」奉納式
- 11月18日 第19回多久市文化祭り(東原庁舎西深校腰鼓隊出演)
- 11月23日 鶴山塾「はじめての短歌⑤」
(講師..角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 11月23日 第28回多久市論語カルタ大会
- 11月25日 佐賀県子ども・若者育成支援県民大会(孔子の里ジュニアガイド出演)
- 11月25日 第26回全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式
公開講演会
- 12月2日 『論語の礼讓』日本に於ける礼讓思想の受容』
(講師..宇野茂彦 公益財団法人斯文会理事長)
- 12月2日 鶴山塾「古文書教室⑦」
(講師..舌間輝吉 多久古文書の村)
- 12月15日 鶴山塾「中国古典の扉⑦」
(講師..武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 12月23日 多久聖廟イルミネーション点灯式
- 12月28日 鶴山塾「はじめての短歌⑥」
(講師..角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 12月31日 執務納め式
- 1月4日 多久聖廟お火つき
- 1月4日 多久市新年の集い(天山多久温泉T.A.Q.U.A)
- 1月6日 第1回絵馬奉納式(多久市観光協会)
- 1月13日 鶴山塾「古文書教室⑧」
(講師..舌間輝吉 多久古文書の村)
- 1月13日 鶴山塾「中国古典の扉⑧」
(講師..武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)

- 1月27日 大町こどもガイド来訪
- 1月27日 鶴山塾「はじめての短歌⑦」
(講師..角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 2月3日 鶴山塾「古文書教室⑨」
(講師..舌間輝吉 多久古文書の村)
- 2月3日 鶴山塾「中国古典の扉⑨」
(講師..武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 2月15日 「ゆめさが大学」佐賀校実践課程1組講義へ講師派遣
- 2月17日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
『戦国時代の龍造寺氏と多久』
- 2月20日 (講師..野下俊樹 佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸員)
- 2月20日 令和5年度国重要文化財多久聖廟保存修理検討委員会
- 2月22日 第2回絵馬奉納式(多久市観光協会)
- 2月22日 「ゆめさが大学」佐賀校実践課程2組講義へ講師派遣
- 2月23日 早稲田大学インターンシップ留学生来訪
- 2月24日 張演氏(中国楽器二胡演奏家)ほか来訪
- 2月24日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
『多久と蓮池―近世佐賀藩における域内交流―』
- 3月1日 (講師..芳野貴典 佐賀県立九州陶磁文化館学芸員)
- 3月1日 令和5年度第4回理事會
- 3月2日 早稲田佐賀高等学校
- 3月2日 「早稲田の聖地さが 大隈重信100年ハイイク」
鶴山塾「古文書教室⑩」
- 3月3日 (講師..舌間輝吉 多久古文書の村)
- 3月3日 鶴山塾「中国古典の扉⑩」
(講師..武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 3月7日 第3回絵馬奉納式(多久市観光協会)
- 3月22日 東原庁舎消防訓練
- 3月23日 孔子の里ジュニアガイド市外研修
- 3月23日 (佐賀市 佐野常民と三重津海軍所の歴史館)
- 3月27日 鶴山塾「はじめての短歌⑧」
(講師..角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事)
- 3月27日 令和6年春季積菜委員会

編集後記

元日を襲った能登半島地震。辛く不安な年明けとなった甲辰の年。世界的にもウクライナやガザをはじめ多くの人々が不穏な日々を過ごされおり、憂えるばかりです。されど、いつしか周囲の木立から春の鶯の鳴き声が聞こえ始めました。今年も春はやってきました。なにげない日常に感謝し、春の日差しが、未来につなげてくれることを願っています。(ほ)

多久聖廟で学業成就や合格を 祈願する「縁起米」の奉納式

11月7日(火)、多久市にある米穀販売会社である株式会社JA食糧さが様が、多久聖廟に祀る孔子様へ令和5年産の「縁起米」を奉納されました。

奉納された佐賀県産米は、「合格びより」と名付けられた「さがびより」、「合格の夢」と名付けられた「夢しずく」、「合格の光」と名付けられた「ひのひかり」の3種類で、それぞれ佐賀県を代表するお米です。縁起米は、米袋に多久聖廟をあしらい、「吾十有五にして学に志す」など論語の章句が記載され、受験生や勉学に励む人々を応援しています。

同社の「縁起米」の企画取り組みは、地元多久市のPRと地域貢献を目的に、令和3年から取り組まれています。奉納式も今年で3回目で、同社はこの取り組みが評価され、一般財団法人地域総合整備財団の令和5年度「ふるさと企業大賞(総務大臣賞)」を受賞されています。

「縁起米」は、多久市のふるさと納税の返礼品としても出品されているほか、多久聖廟近くの多久市物産館「朋来庵」でも販売されています。



令和6年度 鶴山塾 講座 Kakuzan

中国古典の扉

全10回

中国・歴史・文化

開講日 6/4(火)、7/2(火)、8/6(火)、9/3(火)、10/1(火)、11/12(火)、12/3(火)、1/7(火)、2/4(火)、3/4(火)

時間 10:00~11:30

会場 東原庁舎

受講料 500円/1回

材料代 受講料に含む

定員 20人

講師 公益財団法人孔子の里 理事 武田 耕一



「論語」を中心に「孟子」や「史記」などの中国古典も織り交ぜながら、楽しく学べる講座です。

古文書教室

全10回

歴史・地域・文化

開講日 6/1(土)、7/6(土)、8/3(土)、9/7(土)、9/28(土)、11/2(土)、12/7(土)、2/1(土)、3/1(土)、3/29(土)

時間 10:00~12:00

会場 東原庁舎

受講料 500円/1回

材料代 受講料に含む

定員 20人

講師 多久古文書の村 舌間 輝吉



くすし字などをゆっくりと確認しながら進めますので、初心者の方も参加しやすい講座です。

たのしい短歌

全10回

初心者歓迎・趣味
スキルアップ

開講日 6/6(木)、7/4(木)、8/1(木)、9/5(木)、10/17(木)、11/7(木)、12/5(木)、1/9(木)、2/6(木)、3/6(木)

時間 10:00~12:00

会場 東原庁舎

受講料 500円/1回

材料代 受講料に含む

定員 15人

講師 日本歌人クラブ佐賀県幹事 角本 久子



楽しみながら短歌を作る講座、初心者も大歓迎です。



「春を乗せて」(佐賀市 千北誠実)
多久百景写真コンテスト入賞作品



「桜に映える高取像」(佐賀市 武富信義)
多久百景写真コンテスト入賞作品

多久の百景